

八潮南特別養護老人ホーム

品川区の成功報酬は、4月1日を基準日とし、評価期間である前年度1年間に要介護度が改善された人が評価対象だ。

要介護度が1段階改善すると1カ月あたり5万円。さらに1段階改善するごとに10万円が加算される。区内の特養が中心になって立ち上げた「区施設サービス向上研究会」に参加する10施設の入居者が対象。頑張った長くすれば、収入も上がるように、施設のサービスの質や職員の意味

要介護度が改善した施設に「成功報酬制度」を導入している品川区。昨年度の業績を基に、今年4月から支払いが始まった。対象者が8人で最も多いのは、「八潮南特別養護老人ホーム」。「取り戻すケア」の業績を目標としている。

# 品川区の「成功報酬」受給最多



4から3に改善した女性入居者

欲向上につながるのが目的だ。昨年度の業績で、今年4月からは4人が成功報酬の対象となった。

最も多い対象者8人が入所するのは開設する旨の「八潮南特別養護老人ホーム」。中学校を改修してつくられた施設で、階は建物の一部がそのままになっている個室のうち、3階の多床室が部屋。階

「取り戻すケア」を実践  
 りつとまで歩いて移動できなくなるなど、「多くの人はできることが増えたのが改善の理由」と同施設管理責任者市本洋さんは話す。

市本さんが特に改善が見られた話するのは、要介護度が4から3に改善した70歳の女性だ。他の老健から入所してきた5年前、おむつを1時間かかっていたが、常にかかっていた状態を家族や職員との愛ひき寄せおぼろげにまで戻ったという。

助けをすることを繰り返し、徐々に自力でできることを増やしていくのだ。

職員が心がけているのが「声かけ」と「待つ姿勢」。例えば、食事の時間も食べることを強制せず、「食べますか」「今は食べたくない」「少し時間をおいたらまたうかがいますね」といったように、職員が利用者に向き確認をしながら一つひとつ行動に移す。時間や手間はかかるが、利用者本人が「つらい」ときき取り続け

と4階の個室が1部屋あり、広々とした空間が特徴だ。

今年度、施設に支払われた報酬額は80万円。8人の要介護度改善の訳は、5人が今までは3人で暮らしている同施設で日々実践している「取り戻すケア」で、80〜90代、歯を磨いたり、自分の部屋が

現在はおむつがとれず、車いすなどで職員に支えられながら歩くことができない。昨年までは入所して職員と2時間おきに外出。よほど楽しかったらみえて、その時のことばは今まではきくと聞かしている。

同施設で日々実践しているのは「取り戻すケア」。できることは自分で行ってもらい、必要な場合のみ職員が手

るまで待つのが基本的な考えだ。開設から3年たった日々の方々の中に定着しつつあるという。

成功報酬は目的ではなく、結果。このために、特別をこなすものではなく、これまで通りの「取り戻すケア」の徹底に努めた。

成功報酬があるからといって、単純に職員が士気が上がるわけではない。ただ、地道なケアを積み重ね、利用者のできることが増えるにつれて、職員も仕事のやりがいを確実に実感しているという。

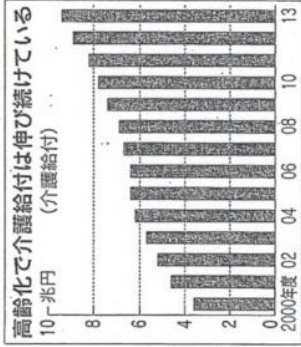
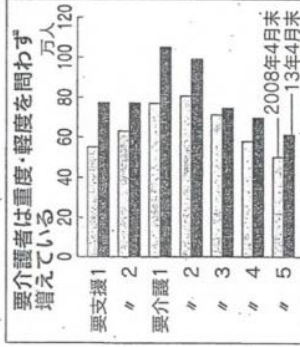
「日々、高齢者の身体機能が低下していくのは自然な流れ。その中で要介護度の維持や改善をしようと難しかったが、今後も改善に向けたケアに取り組みしていきたい」と市本さんは話す。

区の成功報酬については、要介護度の改善だけが、評価を測る物差しではないという批判もあるが、日々の取り組みを評価する目安の一つであるのは間違いないようだ。

# 介護事業に成果報酬

H26. 9. 17 日経

## 利用者の状態改善で増額



厚生労働省は介護サービスを通じて要介護者の心身の状態が改善したかどうかを、事業者に支払う介護報酬に反映させる検討に入った。評価手法の研究を進め、2018年度から評価の高い事業者ほど報酬を多く受け取れる仕組みにする。成果報酬型にすることで高齢者の要介護度の改善を促し、介護給付費の抑制につながる狙い。

社会保障審議会(厚生)付属分科会が16日に開いた研究委員会で、介護の

### 厚労省

## 給付費抑制を促進

賃を報酬で評価する手法を調査することを決めた。今年度いっぱいかけて調査し、18年度の介護報酬改定で反映することを狙う。

業界の介護報酬の仕組みとは、高齢者の介護の必要度を示す要介護度が高いほど介護保険で事業者に支払う報酬は増える。重度の人ほど介護が

事業者には介護報酬を増額する仕組みを目標とする。調査研究は在宅介護を

▶介護報酬 介護サービスを提供する事業者が、対価として受け取る報酬の固定価格。介護保険制度が始まった2000年度から3年に1度見直している。直近の12年度の改定では、24時間対応の定額訪問サービスを導入した。介護報酬のうちお利用者の負担は1割で、残りは40歳以上が納める保険料と、国・地方自治体の負担で賄う。

目指す高齢者がいかに目的で入所する老人保健施設や、要介護者の介護計画を作るケアマネジャーの事業所を対象に実施する。要介護者の運動機能や認知能力などのデータを体系的に集め、介護保険の利用情報と突き合わせる。介護サービスを通じて状態が改善したかどうかを測る。心身の状態改善こそ「成果」をはかる指標だとなく、例えば寝たきりの要介護者のみずれを

防ぐために体の向きを頻りに変えるといった状態改善に向けた過程をみる指標も組み合わせたい。評価には欧米諸国や韓国で先行している。国内でも滋賀県や東京都品川区が要介護度の改善に貢献した事業者に助成金を支給するなど、自治体で独自の取り組みが出ている。高齢化の進展で介護給付費は25年度には現在の倍の約2兆円に増える見

込み。事業者の取り組みで要介護度が改善する高単価が増えれば、中期的には介護サービスそのものが減って介護給付費が抑える効果も期待できる。国や自治体のほか、介護

保険料を納めている40歳以上の国民の負担軽減につながる可能性もある。介護の質を評価する仕組みは政府が閣議決定した新成長戦略に検討することが盛り込まれている。



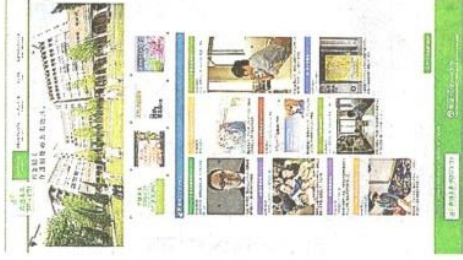
# 介護福祉の魅力 若者に

聖隷クリストファー大（浜松市北区）の社会福祉学部介護福祉学科が、介護福祉分野の魅力を発信する「介護未来プロジェクト」をスタートした。開設したホームページで、従事者の声や現場の様子を伝え、若者にやりがいをアピール。業界の社会的評価の向上や担い手不足の解消を目指す。

きっかけは介護福祉分野を目指す若者の減少。全国的に需要は増え続けているため、学生募集の枠を超えた「マク

## 聖隷クリストファー大

介護未来プロジェクトのホームページ



ロな視点（の取り組み）が必要」と、主導する古川和稔教授（46）は語る。

コンセプトは「明るい介護

デザインの参考になるコンテンツを設けた。第一線で活躍する人へのインタビューや、福祉施設の職員による各施設の

## 現場の声、HPで発信

福祉の未来を考える。「きかない、きつい、給料が安い」という誤解」（古川教授）を解くこと、ホームページにはやりがいや伝わりキャリアデ

日常の紹介、卒業生による近況報告などを掲載している。このほか、冊子発行や最新の介護事情を解説する講座も開く。古川教授は「（介護福

祉職は）高齢者の世話ではなく自主性の回復を支える魅力ある仕事。関心を持つ人が増えほしい」と話している。



介護福祉分野の第一線で活躍する人にインタビューする古川教授（右） 浜松市北区



在籍する社会福祉学部介護福祉学科が介護福祉分野の魅力発信のため展開するプロジェクトで、第一線で活躍する人へのインタビューなどを担当。老人ホーム勤務、宇都宮短大准教授を経て、4月から現職。茨城県鹿嶋市出身。46歳。

「介護福祉分野の現状をどう見るか。」

「従来のお世話型の介護のままいくのか、自立支援型の介護に向かつかという過渡期。つまりとしては自立支援型だが知識や方法論が必要で、できない人々や施設は従来型のまま」

「どちらが好ましいか。」

介護未来プロジェクトを主導する  
聖隷クリスティア大教授

ふるかわ

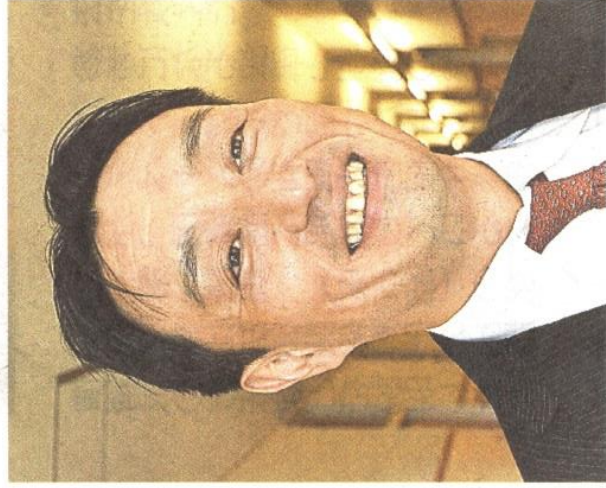
古川

かずとし

和稔

さん

(中区高林)



## この人

「財政面から施設を増やすのは難しい。一方、特別養護老人ホームの待機者は52万人に上る。特養にいる方も元気になって家に帰ることができるよう、自立支援型にシフトするしかない」

「この分野を志望する若者が減っている理由は。」

「高齢者のお世話という

イメージが先行し、魅力を感じることができないのが大きい。身体的にも経済的にも実態以上にしんどいというイメージを持つ人が保護者を含めて多い」

「プロジェクトの狙いは。」

「高齢者に元気を取り戻してもらって仕事だと正しく伝われば、求めてくる若者がたくさんいると思う。介護の仕事の現状を悪いところも含めて発信し、業界への理解を深めたい」



20代のころ、お笑い芸人として活動していた。趣味は走ること。

研究室に  
ようこそ!

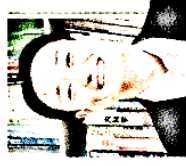


地元大学の  
研究者に  
インタビュー

## 第2回 聖隷クリストファー大学 教授 古川和稔さん(医療福祉学)

特別養護老人ホームをフィールドに、自立支援介護の研究を行っている古川教授。  
元・お笑い芸人という異色の経歴を持つ教授に、介護研究の最新事情を聞いた。

# 全国の介護施設で 「おもつゼロ」を達成



— そんな簡単に元気になれるんですか？

古川 方法は二つあります。一つは自宅で介護を受けている高齢者が、施設に入らなくてもいいぐらいに健康になること。もう一つは、施設に入っている高齢者が元気になって、自宅で生活できるようにすることです。

— 切実ですね。どうすればいいでしょうか？

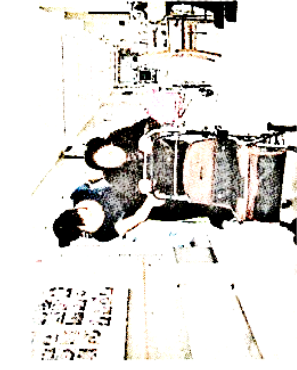
— 主な研究テーマです。

古川 現在、特別養護老人ホームに入りたくても入れない高齢者が、全国に52万人いるといわれています。今後も高齢者は増え続けていきますが、国も財政が厳しいので施設の数が劇的に増える見込みはありません。この大きな問題をどう解決すべきかを考えるのが、主な研究テーマです。

— 介護の研究でどんなことをするのですか？

## 元・芸人の大学教授

# 「本当の笑顔」を追い求めたい



車いす生活だった利用者が、自立支援介護を受けて4カ月後にはシルバーカーで歩けるようになった

— 手厚いケアが逆効果になっているということですね。

— 細くてしまっ。

古川 人間の体って使わないとどんどん衰えていくんですよ。例えば足腰が弱くて歩けない人がいるとしますよね。この人を車いすに乗せて移動のお手伝いをするのが、今までの介護の考え方です。ただ、これだと足腰の筋肉がさらにやせ

古川 ええ。一方、利用者にはできるだけ自分の力で動いてもらい、身体機能を回復させるのが、これから必要になる自立支援介護の考え方。食事や水分をしつかりと摂り、適度な運動をすることで身体機能は驚くほど向上するんですよ。全国の介護施設でこうした取り組みを行った結果、利用者のおむつ着用率が0%になった施設が70カ所も生まれました。

— 介護研究のやりがいとはどんなところにありますか？

古川 実は私、元・お笑い芸人として、電撃ネットワークの2軍などに所属していたんですが、まったく売れず27歳で介護の道に入りました。お笑いも介護も人を笑顔にするという意味では同じです。ただ、ギャグが面白くて笑うのと、「自分でまた歩けるようになって幸せ」と言つて笑うのでは意味がずいぶん違う。あきらめていた人生を取り戻した時に出る笑顔。これこそが、僕ら介護の人間が追い求めなきゃいけない笑いだと思っています。